

琴——近代日本クリスチャン女性の生活史——(一)

川村清志

はじめに

本論は、一人のクリスチャン女性の個人史を記している。名を琴という。彼女は、明治四〇(一九〇七)年に奈良県に生まれ、大正、昭和、そして、平成という時代の大きな移り変わりのなかを生きてきた。彼女は、師範学校の学生時代にクリスト教プロテスタントの一教派、ホーリネス派に入信し、熱心なクリスチャンとしての人生を歩むことになる。やがて、彼女は鹿児島県出身の若き伝道師、丸山栄と結ばれ、愛知県の名古屋の地で教会活動に従事していく。

異郷の地での新婚生活、聖霊のバプテスマの経験、子供たちの誕生と死、宣教師との不和と和解、信徒との確執

など、二人の前には様々な出来事が待ちうけていた。しかし、時代は大きく暗転し、齒車の狂った日本のシステムは、彼らの生活のうえにも暗い影を投げかけていった。

彼女の人生は、特別なものではないが、もちろん、他の誰かと置き換えのきくものでもない。そこに劇的な物語もないし、ある首尾一貫した軌跡が示されるとも思えない。しかし、彼女の人生は、間違いなく彼女のものであり、記憶に刻まれたいくつかの出来事は、その人生にあるハイライトを添えている。本論はそのような出来事のいくつかを糸口に、その半生の見取り図を追いかけようとしている。

本論は、社会学や文化人類学ではライフヒストリー、あるいは生活史と呼ばれる分野に属する。ライフヒストリーは、本人への聞き取り調査を中心に、話者自身が記した手記や話者の近親者や知人へのインタビュー、さらには話者が生きた時代を知るための文献資料などをもとにその半生を再構成するものである。

この研究の基本的な目的の一つは、集団や社会についての巨視的なものの見方からはこぼれ落ちる、個人の微視的な営みに注視するものと位置づけられる。その対極におかれるのは、巨大な歴史の流れとしての政治史や事件史、経済史といった分野である。それらの分野では、民族や国家の歴史的な変遷やその動因を明らかにしようとしてきた。そのときに注目されるのは、革命や戦争のような歴史的に大きな事件であり、そこで大きな役割を担った支配者や政治家といった人びとである。

しかし、現実の社会で生活する圧倒的に多数の人びとは、巨大な政治や経済の仕組みとは、ほとんど無縁に暮らしている。実は、そのような無数の名もない人びとの実践が社会を支え、彼らの営みのうえに歴史は形づくられていく。けれども、かつての社会科学では、そのような微細な営みは等閑視されるか、統計的な数字の羅列に還元さ

れてしまっていた。そこで、ライフヒストリー研究を担うものたちは、人びとの生活を量的なものに還元することなく、彼らが生きた世界の意味を問い直そうとしてきた。

以上が、ライフヒストリー研究が採用される際に用いられる、ややクラシックな説明の仕方である。本論もそれに添うかたちで、琴自身へのインタビューや彼女がまとめた文章、および文献資料にもとづいて構成されている。以下では、彼女が生活した世界と時代についてのデータを補いつつ、時系列にもとづいた記述をおこなっていく。ただ、この試みがどの程度成功しているかは、これを読む方々に全て委ねることにしたい。

一章 出生から入信まで

一節 生い立ち

父母と家族

明治四〇（一九〇七）年一二月一三日、佐伯琴は一三人兄妹の末っ子として生まれた。両親である佐伯政吉、奈良江夫妻の家は、奈良市の中心街である三条通りに軒を並べ、饅頭と土産物を扱っている商家であった。彼女の名は誕生日の一三日と、佐伯夫妻にとって一三番目の子であったことを、一三の弦をもつ「琴」にちなんだものという。ただし、琴の兄妹のうち何人かは早くに逝去しており、彼女が物心ついたときには、四人の兄と三人の姉が生活を共にしていた。琴の兄妹は以下の通りである。

長男の猶吉は明治一八（一八八五）年、長女の政江が同二〇年、次女の久江が同二三年、次男の政治郎が同二四

年、三男幾三郎同二七年、三女花枝が同二九年、四女奈良栄が同三一年、四男富雄が同三二年、五男奈良吉が同三五年にそれぞれ、生まれている。長男の猶吉と琴では、実に二四年の開きがある。

現在なら、八人の子供というのは大変な数だが、当時は、それほど多い数というわけでもなかった。ただ、末っ子ということもあり、両親や祖父母も琴には優しく、のんびりとした幼少期を過ごしたという。

もつとも、琴は少女時代に何回も転居を経験する。思い出だけでも十数回も引越しを行っている。これは、父、政吉の家業についての考え方が反映していた。政吉は、ある場所で商売が軌道に乗ると、そこを息子に任せて別の場所に移った。また、次の場所でも商売を息子に譲り、さらに別の場所で店を出したという。このやり方で、琴の兄弟たちは奈良市の数ヶ所に分散し、商いを営むようになっていった。

琴の一番上の兄、猶吉は体が弱く、神経衰弱といわれていた。長男であったが結婚することはなく、両親とともに実家で生活していた。この猶吉と三女の花枝は琴が成人する前に亡くなっている。

次男の政次郎は、父の商売を継ぎ、三条通りで饅頭屋を開いていたが、彼はそれ以外にも当時としては新しい商売をいくつか兼業している。琴がもの



写真2 琴11歳



写真1 琴5歳

ごころついたときには、政次郎は同じ三条通りの近所で、写真館を開いていた。写真1と写真2は、それぞれ琴五才と一一才の頃の写真である。これらは、ともに政次郎が撮影してくれたものようである。この章の後半では、彼が撮影したものを含めて、琴のアルバムに収められた写真の何枚かを紹介することにした。

琴の姉たちはいずれも奈良市内に嫁ぐことになる。琴によると、最初、長女が嫁ぐつもりの家を本人が嫌がったという。そこで次女が嫁ぐこととなり、結果として次女の久江の方が、先に結婚したということである。ちなみに久江は、裁縫の先生として尋常小学校の教員をすることになる。

尋常小学校

当時の尋常小学校を修了した琴は、高等小学校に進学する。ただ、それまで琴が通っていた椿井小学校（当時は奈良第一尋常小学校）には高等科がなかったため、少し離れた飛鳥小学校に進学した。自宅から飛鳥小学校までは、歩いて三〇分弱の距離である。

高等小学校では、音楽と数学に自信があったという。唱歌を教える土山という先生と男子師範学校から来ていた先生たちの授業が楽しかった。音楽会では、一年も二年も独唱する機会をえた。一年の時には、「星と花」を歌い、二年の時には、「戦のあと」と「花売り乙女」を歌った。

その一方で、裁縫や手芸などの授業はどうにも不得手であった。成績も



写真3 修学旅行

一〇点満点中、八点より上の点はもらえなかった。そのため、のちに女子師範学校を受けるときには、内申を気にしなければならなかった。

琴の両親は、女の子は高等小学校まで行けば十分だと考えていた。卒業後は裁縫でも習いに行かせるつもりだったようである。しかし、琴自身は学校生活に愛着を持っていた。これより上は師範学校しかないと考えた彼女は、学校の教官から補講を受けて師範学校の入学を目指した。この時、同じ補講を琴の他に二人の友人も受講していた。

師範学校の試験の合否がきたのは三月一〇日であったと琴は記憶している。その日は陸軍記念日で付属小学校では恒例の音楽会があった。この陸軍記念日とは、日清戦争で旅順が陥落した日を指している。この時も彼女は、独唱で「戦のあと」を歌った。歌い終わって席に戻ると、一年の担任だった先生が師範学校の合格通知がきたことを知らせてくれた。嬉しい思いの反面、共に受験した三人のうち、一人が不合格だったのが心残りであったという。

二節 奈良師範学校時代

学校での生活

大正一一（一九二二）年、四月。奈良県師範学校生としての生活が始まる。琴、一四歳の春である。師範学校は、初等教育の教員養成を目的とした学校であり、各都道府県に一枚ずつ設置されていた。奈良師範学校は、明治二一年奈良県尋常師範学校として、奈良町大字登大路二三番地に創設された。現在の国立奈良教育大学の前身である。

琴が入学当時、師範学校は四年制であった。学校は、一学年につき四〇人だが、県内各地以外に県外からも学生が集まっていた。遠方から入学した学生の多くは、寄宿舎に入った。また、市内に住む者でも寄宿する学生が何人

かいた。琴の友人である森さんもその内の一人である。彼女は、三条通りの老舗の旅館の近くで下宿屋をしていた。家よりも勉強する環境を重視したからだろう。琴曰く、彼女は、「ちゃきちゃきした子」であった。琴よりも成績が悪いと言つて、涙することもあつたらしい。運動会では花形で「鹿のよな子」だったとも琴はいう。もつとも、師範時代、体育の高飛びの成績が、森さんが一番だったにも関わらず、その記録が琴になつていたことがあつたという。

琴は自宅から歩いて二〇分ほどのため、通学することを選ぶ。それは彼女自身が「青春時代」と回想するように、様々な出会いと経験の時期だった。

学校は、朝の八時から始まり、午前中に四時間、午後から二時間、授業が行われた。学校に着くと、個人の手荷物を置くための控え室へ向かう。そこは寄宿生と通学生に分かれて備えられている。通学室は二部屋あり、一年と三年、二年と四年に分かれて利用していた。通学生は一学年でせいぜい五、六人である。よつて一部屋の利用者は一二、三人ほどであった。授業の合間には本を入れ替えに行くくらいで、ゆつくりと部屋に座り込むのは昼食と放課後位に限られた。それも一、二年の頃は、上級生に気兼ねして放課後もすぐに部屋を辞していた。しかし、三、四年になると部屋の奥を占領し、放課後



写真4 師範学校冬服



写真5 師範学校1年記念撮影

も話し込んで遅くなることが多くなる。そんなときは門衛番の先生を気にしながら校門を出なければならなかった。自宅から通う琴は、よく遅刻した。その理由を琴は、友人との待ち合わせのためだという。友人の一人、増田さんは、学校から一五分ほど離れている当時の国鉄、京終駅きょうしゅうばてから通っていた。彼女と待ち合わせてから学校に向かったので、学校へ行く時間が余計にかかったらしい。もともと、この辺りの記憶は、個人の思い込みが強いので、割り引いて考えた方がいいかもしれない。あまりに時間に遅れると授業に出ないこともあったというから、現代の大學生と変わらない生活だったようである。普段、手荷物をおいておく控え室で話し込んでいると、隣の部屋にいた査監が部屋を見に来るため、慌てて教室に行くこともあった。

あまり成績は良い方ではなかったが、無邪気な性格で先生からも悪くは思われていなかっただろう。そう、琴本人は語る。また、琴の父は厳しかったが、学校の成績については、ほとんどかまわなかった。そのため、自宅生でも琴は、自由な学生生活を送ることができた。

試験勉強中でも、公園にでて散策することがあった。春日大社の参道の南側に広がる浅茅ガ原と呼ばれる森と野原が広がる辺りである。師範学校からは、歩いて一五分ほどの距離だった。馬酔木の茂みのなかで寝転びながら試験問題の暗記をしたり、様々な空想を巡らすこともあった。友人と連れだって色々な話題に夢中になることもあった。当時は、まだ、公園に出向く人も少なく、車と言えば人力車が遠くを通り過ぎる程度である。

現在は観光名所となっている「ささやきの小径」でさえ、人影もまばらで図書館より静かだったという。路沿いには、樹齡が何百年もある檜や榎や杉の木々が点在する。こんなのにのんびりとしていて無事卒業できたのは神の恩寵以外にはない、と琴は記している。「恩寵」かどうかはわからないのだが、こんな出来事もあった。

琴が四年の春のことである。選考科目時間が土曜日の四時間目にあつたが、授業に出ずに、映画を見に行つたことがあつた。映画は、『嘆きの孔雀』といつて栗島すみ子の主演である。この日で映画は終わるが、夜は家を出してもらえない。そこで昼の部を見るために授業を抜け出すことになつた。

もちろん、真昼に門衛のいる正門から出るわけにはいかない。幸い、通学生の控え室のすぐ横の空き地から外に続く裏門があつたので、友人の増田さんと一人で学校を抜けだした。後でこのことがわかり、職員室でも問題になつたという。しかし、誰が映画に行つたかを特定することはできず、何の処分も受けずに済んだ。

この頃、奈良市内には、数軒の映画館が営業していた。その多くは、猿沢池の南側に広がる奈良町か、メインストリートの三条通り周辺に点在していた。近くには、寄席のような芝居小屋もあつたという。もつとも琴たちは、映画館にはいつても、見終わつたあとに喫茶店に行くこともなく、すぐに帰宅していたそうである。

しかし、しばらくして同じような事件が起きた。寄宿生の学生が自宅生の友達の家泊まつて映画に行つたが、この時には学校側にそのことが発覚してしまう。泊めた学生も泊まつた学生も、一週間の停学処分を受けただけでなく、修学旅行にも行けなかつた。琴としては何とも言えない気分である。

琴のアルバムから

ここで興味深いのは、この師範時代を中心として残されている琴と学友たちとの写真が収められているアルバムの存在である。すでに紹介した幼少の頃の琴の写真もこのアルバムにおさめられている。少し時代は前後するが、このアルバムの写真をいくつか紹介しておきたい。

写真3は、尋常高等小学校の修学旅行の際の写真である。「二年の修学旅行で、琵琶湖めぐりの船中で知り合った夫婦に撮ってもらった」と添え書きされている。琴は、前列の右端に座っている。ちなみに師範学校での修学旅行は、写真としては残っていないが、鎌倉に赴いたようである。失われた写真のページには、「最後の修学旅行。江ノ島にて。ピンクと云おうか灰色と云おうか、絵がける如き空中に浮かぶ富士をバックとして撮る」と記されている。

写真4は、「師範に入って初めての冬服を着てつんと怒った顔」であるらしい。当時、師範学校では、男女ともに制服が決められていたようである。同じ頃に撮影された記念写真が写真5である。「一年をやつとおえて四年の人や二部の人を送る時の悲しい様な嬉しい写真、通学生一同」と記されている。前列の右から三番目が琴のようである。

写真6は、庭球のコートでの写真撮影である。師範学校の運動場での一場面である。クラブではなく、授業の環境でおこなわれたものようであるが、彼女がモダンなスポーツも経験していたことがわかる。

写真7には、「大正一四年一〇月二日、月見の日の放課後。思い出のため、五年生通学の者一同と、思い出多き通学室をバックとして」という但し書きが添えられている。

どうやら、琴たちが授業の合間や放課後にあつまって騒いでいた控え室を背景に撮影したものようである。写



写真6 師範学校テニス

真のなかで四人は窓から顔を出し、琴を含めた四人は表に出て写っている。これも教員が撮影してくれたものようであるが、構図にも工夫のあとがみられる。また、写真8は、卒業前の写真である。冬であるが、野外で撮影されている。添え書きによるなら、奈良県の中部を流れる大和川の岸辺で級友たちと写したものである。

琴の写真を見ると、当時、写真が人びとにとって身近なメディアとなりつつあることがわかる。彼女の幼少期や高等小学校時代の写真では、そのほとんどが室内での個人撮影か、集団による記念撮影の形式をとっている。もちろん、このような形式はその後もなくなるわけではない。しかし、琴の師範学校時代、大正も終わり頃になると、彼女の写真には、屋外で撮影されたものが目立ち始める。それも集合撮影や屋内での個人撮影ではなく、友人たちとの日常生活を意識した写真がふえている。それは、写真を撮影する機材の発達とともに、写真の普及に合わせて現像費なども廉価になっていったことが類推されるだろう。

写真9は、大正一五（一九二六）年、琴が二〇歳のときに撮られた写真である。当時、奈良の興福寺の公園の近くには、このような乗馬ができる施設があったという。ちょうど卒業記念をかねたものかもしれない。彼女は、級



写真7 師範学校通学室にて



写真8 大和川にて

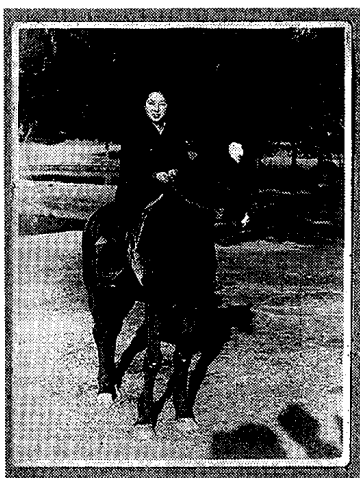


写真9 琴乗馬写真

友たちとともにこの撮影にのぞんだようである。おそらくはおとなしい馬が選ばれているのだろうが、それなりに落ちついた乗馬姿である。

実習での体験

琴たちが四年になったとき、師範学校が五年制となる。大正一四（一九二五）年のことである。自動的に琴たちは五年生と呼ばれた。学生最後のこの年は、先生となるための実習が始まる。琴は教壇にたつ訓練として、付属小学校の教生として子供たちの指導にあたった。一年から高等小学校まで、各学年が五、六ずつの組に分かれている。琴は六年生の国語と歴史を受け持った。

当時、付属小学校に入学する子は優秀な子が多く、授業は真剣そのものであった。六年生にもなれば、中学校や女学校を受験する児童も多い。授業中にガサガサする子は一人もなく、皆が教壇に初めて立つ琴をじっと見つめた。そんな生徒たちの態度に、琴は怖れさえ感じたという。

子供たちはよく勉強し、自分のような者の話や指導を素直に受けてくれる。しかし、こんな自分が純真な児童の前に立つ価値があるのか、そう思えて苦しくなったと琴は記している。むしろ、生真面目なのは琴の方だったのかもしれない。初めての授業で、必要以上に過敏になっていたのだろう。けれども、実習で感じたプレッシャーは大きく、哲学関係の本や修養書を読んで自信をつけることを考えた。

やがて、一学期も終わりに近づいた頃、琴に転機が訪れる。キリスト教との出会いである。

三節 キリスト教との出会い

入信

夏休みの一週間ほど前、七月末のことである。キリスト教の天幕伝道が、学校の広場で行われた。天幕伝道とは、文字通り広場などに大きな白い布で幕を張り、そのなかで牧師が説教を行うという形式である。夕方からなので、涼みがてらに行こうと友人と誘いあう。特別関心があったわけではなく、なかば好奇心からである。

琴がキリスト教の存在を全く知らなかったわけではない。それ以前にも彼女は、賛美歌の練習で友達と教会を訪れたことがあったという。

大正期にはキリスト教が、様々なメディアを通じて一般にも知られ始めていた。白樺派をはじめとする多くの文学作品が、キリスト教をテーマに扱うのもこの時期である。

キリスト教の雰囲気、西洋のモダンなイメージと結びつき、一種の流行を形成していた。若い世代にとってキリスト教的なアイテムは、——今日のクリスマスやバレンタインデーと同じく——ファッションとして受け入れられる素地ができてきたのである。

しかし、この時の集会は、琴にとって全く違った意味を持っていた。説教は、人間の罪と神の赦しについて、七月二五日から三一日までおこなわれた。この当時のことを琴は、結婚後に自らの「救の證詞」として記している。

・・・その夕方、丁度途中で我が学校の側の廣場でキリスト教の傳道會があると聞きました、また少し早いから聞きに行かうかといふ氣持に成りまして途をかへて急ぎました。天幕の中で集會が有りました。初めは、入り難

いでしたが進められて隅で恐縮しながら聞いて居りました。最初に若い私位の男女の方が自分の信仰生活に對する感謝を話されて、それから、説教を初められました。今その時の話は十分に思ひ出せませんが、私達は神様の目から見れば皆罪人で有る事は先ず知らなければ成ら無いと色々な例話によつて話されました。そしてその晩は終りましたが、家に帰つた私は何だかぼんやりしてゐた頭に光を与へられて道がわかつた様な氣持と不安な氣持で話された事を考へながら眠りました。それから卅一日まで每晚キャンプの集りが有りましたから、引きづられる様に行きまして熱心に話を聞く内に自分は神様の前にも人の前にも大いなる罪人だのに温順な人間の様な態度で誤魔化して居つた事などはつきり解りました。

・・・罪のことがわかると小さい事まで次から次と思ひ出されて頭や胸を搔破りたい程に成り、自分がよくも今まで平気で居つたものだと思はれて苦しいでした。けれどもこの苦しみから逃れる方法も教へて頂きました。それは「もし己の罪を云ひあらはさば神は眞実にして正しければ我らの罪を赦し、凡ての不義より我らを潔め給はん」とある様に罪を認めてお詫をするならばキリストが罪の身代りと成つて下さつた為に神様は赦して下さいる事ですので、私は今までの親や兄弟に成した罪を思ひ出す儘、神様にお詫びをしました。そして聖書の「己の罪を云ひあらはさば・・・罪を赦し・・・」と有ります通り赦されたと思ひました。それからは今までの不安や淋しさが無く成り、喜びながら学校に居ても家に居てもキリストが私達の罪の身代りとなりて十字架に懸つて下さつた事を信ずる様に進めました。^{*i}

キリスト教の思想は、琴にとつてとても新鮮な考え方だった。自分の今までの觀念にない言葉が、琴に大きな印

象を与えた。彼女は、自分が「罪人」だったから、純真な子供の前に立つのが恐かったのだと考える。罪が赦され、救われるために彼女は、教会へ行くことに決めた。

彼女が通い始めた教会は、プロテスタントのホーリネス派に属していた。ホーリネス派は、一八世紀のイギリス国教会の司祭、ジョン・ウエスレーが唱えた「メソジスト運動」に端を発している。彼自身は生涯、英国国教会の信徒であり続けたが、ウエスレーの改革は、アメリカにおいて大きく展開していく。その教えを継承するメソジスト派の牧師であった中田重治が、明治三四（一九〇一）年に東京神田神保町に中央福音伝道館を開き、あわせて伝道師を養成する聖書学校を始めたのが、日本のホーリネス教会の始まりと位置づけられている。

中田は、宣教師のC. E. カウマン夫妻と提携して伝道活動に従事しE. A. キルボロン、笹尾鉄三郎らもこのグループに加わっていった。こうして、一九〇五年には「東洋宣教会」という組織が形成され、さらに大正六（一九一七）年には、「東洋宣教会日本ホーリネス教会」と改称される。それまでの教派を越えたゆるやかなつながりから、一つの教派として組織化され、中田はその初代監督に就任することになった。

ホーリネス派は「聖潔派」とも呼ばれるように「聖潔」という考えを重視した。このような思想は、アメリカの長老派教会の牧師、A. B. シンプソンの「四重の福音」という思想を基盤としている。そこでいう「四重の福音」は、「新生、聖潔（今日では聖化と呼ばれる）、神癒、再臨」をさす。まず「新生」とは、神によってこれまでの人生を刷新し、新たな生を受けることである。「聖潔」とは、原罪を背負った人生から聖潔られるという主に信仰者の内的な経験をさす。信仰者が、神からの恵みや御霊を感じ、罪が清められたという実感をともなった経験をもつことが強調されている。

また、第三の「神癒」とは、神が人の癒し主であるという信仰であるとともに、肉体的ないしは精神的な病から癒される経験を指示している。最後の「再臨」とは、文字通りイエス・キリスト自身が神の国をもたらすためにも一度、この世界に戻ってくることへの信仰である。この「再臨」への信仰は終末思想と表裏一体の信仰でもあった。このような思想の展開と時代的な背景については、もう少し後にみていくことにしたい。

さて、琴は八月から教会に通いはじめ、一〇月には洗礼を受けることになる。一度決めてしまえば迷わずに、あるいは、後先考えずに物事を遂行する。彼女のこの性格は、この後の人生の転機においても、繰り返し現れることになる。

キリスト教徒において洗礼はもつとも重要な人生の岐路である。それは、聖書が記す「原罪」を含めたあらゆる「罪」から解放され、神に従う生き方を表明する場でもある。もとはギリシア語のバプゼインからきているが、それは「浸す」「(水に)沈める」という意味である。水に自らの身を浸し、罪を浄める行いが洗礼といえる。

洗礼とは、キリスト教徒としての資格をえるための通過儀礼でもある。それによって教会の正式な会員とみなされた者は、聖餐式などの行事に参加するとともに、献金などの義務に近い奉仕も求められる。カトリックなどでは、「幼児洗礼」といって生まれてすぐに洗礼が施され、その時点で信者とみなされる。これなどは、教会が各々の地域の人口や戸籍を管理していたことを意味している。それに対して、多くのプロテスタントでは、自らの意思で洗礼を受けることによって、各々の教会や教団に加入することが一般的であった。

琴の授洗(バプテスマ)は、一〇月一四日、奈良と京都の県境を流れる木津川で行われた。現在の日本基督教団では、授洗する者は、教会にて頭に水を注がれるだけである。このような式は、「灌水礼」と呼ばれる。同様に牧

師が水に濡らした手で信者の頭をおさえ、静める所作をおこなう「滴礼」という式法も存在する。しかし、当時、琴が属していた教派では、聖書の福音書に描かれるバプテスマの記述と同じく、授洗者自らが川に入り罪を清める儀礼——分類上は「浸礼」と位置づけられる——が行われたようである。

写真10は、やや時代がくだるが、琴たちのホーリネス教会で撮影されたものである。中央やや左側にみえるように昭和四（一九二九）年六月二日におこなわれた洗礼式の記念撮影である。新たに洗礼を受ける者だけでなく、教会の信徒が集まって洗礼式を祝している様子がうかがえる。

授洗後は路傍伝道にもついていき、公園などでも救われた証を行った。まだ、師範学校に在学中のことである。学校の化学の先生からも「教会は行ってもいいが、道で説教はするなよ」と咎められたこともある。しかし、琴にとって罪を赦されたという思いは、生活していくうえで心の構えを確かなものにした。

おそらくこの頃に、彼女が見出した聖句がある。

わたしはあなたに命じたのではないか。強く、また雄雄しくあれ。あなたがどこに行くにも、あなたの神、主が共におられるゆえ、恐れてはならない、おののいてはならない。

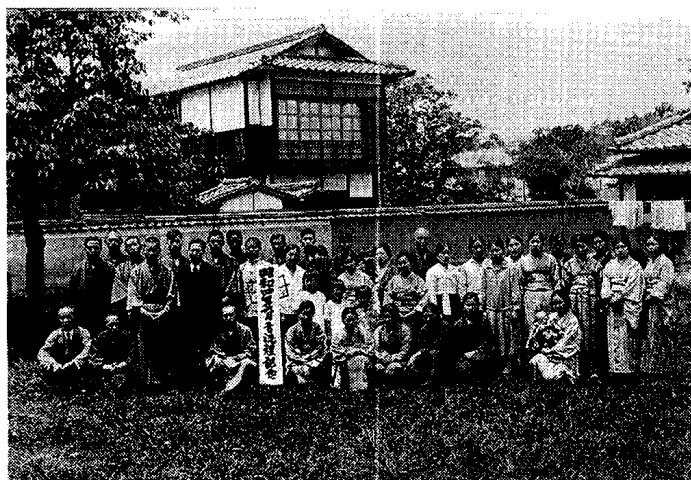


写真10 教会洗礼式

これは旧約聖書、ヨシユア記の一章九節である。後年、琴は、子供達や孫が入学や就職試験に臨むときにこの聖句を送っている。それは、ちょうど、彼女が師範学校から教員の実習をはじめた頃の経験に裏打ちされたものだった。実習で教壇に立ちながら、子供たちに対して負い目を感じる自分の気の弱さを彼女は痛感していた。自分は何かしつかりしたものを持っていない、自信が持てない。そういう思いが彼女をキリスト教に導いた。そんな自分にもっとも適した言葉はないかと思つたときに与えられた聖句が、このヨシユア記の一節であつたという。

教員として

受洗した翌年の大正一五（一九二六）年四月、琴は無事に奈良師範学校を卒業し、奈良県月ヶ瀬村にある月ヶ瀬尋常高等小学校に赴任した。月ヶ瀬村は、奈良市の中心部から一五キロほど東に入った山間部に位置する。市内からは、当時の国鉄で京都方面の列車を利用し、「笠置山^{かさぎ}」という駅からバスに乗り継ぐことになる。帰省の際にはバスの時間が合わないこともあり、約一〇キロの道のりを歩いていたともいう。

家から通うには遠すぎるため、琴は赴任先で寄宿生活を送ることになった。ただ、この学校には、彼女が赴任する前に姉の久江が裁縫の講師として勤務していた。その縁もあつて、彼女の寄宿先も久江の夫の実家であつた。ちょうど、琴が赴任したときに、久江の夫は小学校の校長であつたという。

その頃の月ヶ瀬はやや市街地から離れたところでもあり、裁縫のような実技科目が主で、一般の科目がそれに準じて教えられていたという。琴が師範学校時代、もっとも苦手だつた教科が裁縫であつたというのは、本人も記す

ところである。それがよりによって授業の中心が裁縫を教える学校に赴任することになったわけである。

琴が赴任した頃には久江は加茂の小学校に移っていた。加茂は京都府に属するが、月ヶ瀬に向かう路線では、一つ奈良駅寄りに位置する。関西本線は、奈良の次に木津、加茂、そして、笠置山と続く。彼女に連絡しておく、列車が加茂駅を通る時間に合わせて、駅から手を振ってくれたこともあったという。

また、琴の父が、この寄宿先を訪れてくれたこともあった。琴が学校に行っている間に、近所を散歩し、辺りにいた子供に駄賃をあげて、川魚を取ってもらったようである。「このあたりの子供はすばしこいのばかりで、川魚も手づかみでとつてこる」といって、学校から戻ってきた琴に取れたハヤ（ウグイやオイカワの仲間）を見せてくれたこともあった。

こうして、琴の教員としての第一歩は、両親や兄弟たちに見守られながら、順調にはじまったようにみえた。しかし、その一方で、キリスト教の信仰という面からは、いくつかの困難が生じることになる。

初めて実家を離れての寄宿舎生活が始まると、教会に出席するのは休暇の時だけとなった。そのため、琴自身によれば「信仰が鈍くなり、元の木阿弥とでもいうようになってしまった」という。

しかし、ある時こんなことがあった。その月の給料をもらった翌日、いつものように他の先生たちと学校へ向かった。新任だった琴は、田んぼの細道を皆の後ろから歩いていった。ふと下を見ると自分の財布が落ちている。驚いて拾ってみると確かに彼女のものである。給料はそのまま入っていた。ちなみに彼女の初任給は四〇円である。

おそらく、昨日の帰り道に落としたのでだろう。気づかずに今日までいた。ぞっとするとともに彼女は神の守りに感謝した。「昨日から何人も人が通り、今も前を歩いていた人には見えずに自分だけに気づかせて頂いたのは、

神の守り以外にはなかった」と琴は記している。一月分の給料がなくなれば、今日の食費にも事欠くところである。月ヶ瀬小学校に赴任して二年後には、奈良県生駒郡の立野尋常小学校（現在の三郷小学校）に転勤となる。今度は奈良県の南西部の丘陵沿いに位置する学校であった。自宅からの通勤が可能となり、教会にも通えるようになった。しかし、また、問題が生じることになる。

それまで務めていた女性の牧師にかわり、面識のない青木牧師が着任していた。雰囲気の違いもあり、少し足が遠のきそうになった。しかし、教会の長老の一人が、度々家を探ねてくれたので、信仰を持ちなおしていく。やがて、日曜学校の担任を命じられて、聖日に休むことができなくなったことも結果的にはよかったようである。

この時期、琴は、三条通りから小西通りを少し南に入ったところで両親と兄夫婦とともに住んでいた。この家の一階の表部分では、兄がビリヤード場を経営していた。この兄は、かつては写真館を営んでいたこともある政次郎で、琴によれば、「新しいもの好き」であったとのことである。このビリヤード場の奥で兄夫婦が生活し、二階で琴と両親が暮らしていた。

琴はそこから、三条通りをまっすぐに西に向かい、国鉄奈良駅から汽車で立野小学校まで通っていた。奈良駅から南へ向かう列車で四駅目の「王子」まで乗ることになる。月ヶ瀬に向かうのは反対の路線である。彼女いわく、三条通りまで出れば、「三分で駅に着いた」という。当時は建物も低く、また、行きかう車などなかった。だから、三条通りを横切る電車が見えたところで、走り出せば間に合ったのだという。

もつとも、琴の家から奈良駅までは、どう見積もっても五〇〇メートル以上ある。かりにその距離を三分強で走りきったとしても、電車がその間、駅に停車していなければ、到底間に合ったとは思えない。いずれにせよ、師範

学校以来、彼女が時間ぎりぎりに学校に行く癖は直らなかつたようである。

父の政吉は琴のことを「耶蘇狂いになりおつた」と言いながら黙認状態であつた。そのため、日曜には教会での奉仕を自由に行うことができた。彼女は、教会から少し離れた家庭で行われる山城町（京都府）の家庭集会にも参加していた。副牧師の島田先生と平群（奈良県生駒郡）あたりの訪問に行き、信徒の家に泊まることもあつた。こうした経験を通じて、琴はクリスチャンとしての信仰と自分の日常的な生活とを結びつけていった。

四節 一つの説教

琴のメモから

ただ、この時期に、どのような説教がおこなわれていたかを示す興味深いメモが、琴が当時使っていた聖書の裏表紙に残されている。このメモには、琴が教会で聞いていた説教の要旨が、示された聖句に続いて片仮名と漢字で記されている。牧師が話した内容をできるだけ簡明にまとめようとした様子がうかがえる。彼女が整理したままの状態で次に記してみよう。ただ、原文は片仮名による表記となつているので、その部分だけを平仮名にあらためておく。

イザヤ書46―11（我東より鷺を招き云々）

同 41―2, 25（東より人を招き諸々の国を服さしむ）

同 59―19（日出づる所にてその栄光恐るべし）

詩編 113—3 (日出づる所より日の入る所云々)

マラキ書 1—11 (日出づる所より我が名は大ならん)

ゼカリヤ書 8—7 (民が救われるのは日出る国が先)

イザヤ書 43—5 (ユダヤ人の救いは日本民族によつて為され東の国におる者が一番先に救われる)

同 55—5 (知られざる国民の台頭)

世界を制覇するのは日本である。その制覇は神によりて成されるのであるから、世々の御経綸たる選民イスラエルが赦される(暴悪なる国々より)。イスラエルは永遠に神の家族であつて人間的王はいらない。又全世界は彼らの嗣りとして授りべきものであつて、神のものは彼の選民イスラエルのものである故に彼らは永遠に神の祭司である。彼ら全体が一個の祭司として見られるべきである。故に彼らにはその住居によつて土地と神を祭る所があれば足りるのである。故に彼らには現在唱えられている如き国(独立的国あるいは強国)を必要とせ^(ママ)ないはずである。

時に我が日本(東の国の民族)は、世界を制覇して諸国諸民を神の大能のもとに治め導く大使命を神より付与されているのである。故に聖書の中に記されてある諸国民を制覇し得た時、軍事的に政治的に経済的にその長としてたてらるべき者は、最も功在りし日本の国である。

このメモは、琴によると昭和五(一九三〇)年くらいに記したものだという。冒頭から度肝をぬく「世界を制覇するのは日本である」という言葉は、右翼の凱旋車からもそうそう聞こえてこない台詞だろう。そこから議論は、

一端イスラエルへととび、その世界史的な位置づけ——民族全体が「神の祭司」——がなされるとともに、現実の社会での影響力は否定される。「彼らにはその住居によろする土地と神を祭る所があれば足りる」ので、独自の国を必要とすることは無いという。そのうえでこの説教では、「軍事的に政治的に経済的」世界の長となるのは、つまり、現実の世界の覇者となるのは、日本であると断言している。

ここで牧師が引用した聖句をもう一度みてみよう。興味深いのは、これらの引用が、特定の言葉によって選出されている点である。その言葉とは、「東」と「日出る国」である。今日の一般的な神学解釈によれば、旧約時代において東の国とは、当時のユダヤの東方に位置していたアッシリアやバビロンなどの古代帝国であると考えられている。

そもそもユダヤ王国は、紀元前一〇〇〇年前後に一二の部族が統合して成立したとされる。その二代目の王であり、聖書にも繰り返し登場するダビデとその息子ソロモンの時に、王国は栄華をきわめた。だが、ソロモン王の死後、王国内では反乱が生じる。その結果、ユダヤ王国は、一〇氏族からなる北のイスラエル王国と二氏族からなる南のユダ王国に分裂した。紀元前九三三年のことである。

この二つの王国のうち前者は約二五〇年、後者は約四〇〇年、各々独自の王国として推移していく。北はサマリヤを、南はエルサレムを、それぞれ首都とした。しかし、紀元前七二二年、まず、北王国が東方の大国アッシリアの攻撃にあい、イスラエルの地を追放される。以後、北王国を構成していた一〇氏族は歴史上から姿を消し、イスラエルの失われた一〇氏族と呼ばれることになる。

さらに約一五〇年後の紀元前五八六年には、当時の中東全域を支配下に治めつつあったバビロニア帝国により、

南王国も滅ぼされた。バビロンの王、ネブカドネザルは、ユダヤの民の精神的支柱であるソロモン王が建てた神殿を破壊し、王国の首都エルサレムを占領した。こうしてイスラエルの民の多くは捕囚として、バビロニアへ連行されることになる。

実は、この説教で繰り返し引用されている『イザヤ書』（の一部）は、この捕囚下で著わされたものと考えられている。他民族による圧倒的な支配のもとで、ユダヤ教は、ヤハウェを唯一の神とする一神教として再組織化されていた。同時にそれは、民族を救いだすメシアを待望する信仰を民族のアイデンティティに据える役割を果たした。

当時の預言者たちは、イスラエルやユダの民が神の定めた律法に従わず、他の神々を信仰したために、国が攻め滅ぼされたと主張した。そのような「神の鞭」として登場したのが、「日出づる国」、アッシリアやバビロンであったわけである。

だが、説教ではそれらの聖句が、牧師が生きていた同時代的な状況を預（予）言するものとみなされている。^{*3}「東」と「日出る国」は「日の本」の国、日本のメタファーとなり、その政治的、軍事的な優越が説かれていく。日本は「世界を制覇して諸国諸民を神の大能のもとに治め導く大使命を」付与されているとされる。当時、このような聖書の言葉を借りて日本のナショナリズムを賞揚する説教が行われていたことは注目に値する。西洋列強に対する日本の優位を示すために、西洋のイデオロギーのコアとも言うべき聖書を引用するという転倒がここには顕著にみられる。

もちろん、戦前のキリスト教組織が体制に迎合し、翼賛化していったことはすでに指摘されており、その一部に

ついでには現在の「日本基督教団」も認め、遅ればせながら謝罪を行ってきた。^{*4}

だが、問題となるのは、それが語られている場とその時期である。ここで示された主張は、公の文書や発表ではなく、日常的な説教の場において提示されたものである。語る牧師も聞く信徒も、それらの言葉を国家的な作為によって押しつけられたものではなく、自らが選んだ日常生活の延長上で受け入れている。このことは、社会システムが無理矢理に人々をナシヨナリズムやさらには戦争へと導いたわけでないことを暗示する。キリスト教という「日本」社会からは異質にみえる集団においてさえ、下からこみあげてくるナシヨナリズムの地響きを聞き取ることができるだろう。

ホーリネス教会の立場

もうひとつ、ここで留意したいのは、琴が当時属していたホーリネス教会とその中心的な人物である中田重治のキリスト教理解の特質である。すでに述べたようにアメリカでの留学体験を通じてホーリネス派を組織した中田であったが、ちょうどこの昭和初年頃において大きな動きがあった。その経緯に触れるまえに、もう一つの資料を琴の聖書のなかから紹介しておきたい。その聖書に挿まれていた紙片には、「大和民族の使命（ホーリネス）の歌」と題された歌が記されている。

一 あじやの東に咲ほこる

大和桜をそのままに

朝日にはゆる我民の

使命はおもし天地に

起てよ我 聖徒らよ 祈れよもえて

示せ光をはたせよ 使命

二 日出づる国にのばされし

せつりのみてまもれよ神の道

我がはらからよ日の民よ

いさみてまもれ神の道

三 日なりたてなる神のては

我が日の本とイスラエル

三千年のその昔

むすびたまひしくすしさよ

四 進めよ世界のただ中に

きづけよサレムの石垣を

のろひはさりて地はやすし

神のみ国のかがやきに

五 主のめし受けしはなよめよ

血しほを流して苦とうせし

我が主の愛にもやされて

祈れ栄をうるまでは

六 我が太陽ののぼる朝

六千年のよはあけて

かほりも高し日の丸の

菊にさくらのその姿

この歌には、中田のキリスト教理解の特質を如実にみることができ、この歌で称揚されているのは、ひとつには「日本」という帝国の世界的な意義である。一番では「あじやの東に咲ほこる」国家として日本が位置づけられる。二番以下でも日本は、「日出づる国」、「朝日にはゆる我民」、「日の民」、「かほりも高し日の丸」というように、いたるところで「太陽」のメタファーと関連付けられている。それが当時の日本帝国を象徴するものではあれ、その引用の仕方はいささか過剰にもみえる。おそらく、それは先の説教にみられるように『聖書』に登場する国を「日本」と推定することによって補強されたメタファーであるといえるだろう。また、これらのメタファーを補完するものとして、一番の「大和桜」や六番の「菊にさくら」などの花々が登場していることも、確認しておきたい。もうひとつ重要な点は、イスラエルと日本との特殊な関係の強調である。「神の手」として、「日の本とイスラエル」がならんで登場し、三千年にわたる歴史的なつながりがあることが歌われている。そして、この両者は、世界

のただなかにあって、「サレムの石垣」、つまりは「神の国」を築きあげる礎となる使命があるという。五番の「主のめし受けしはなよめよ」とは、聖書に記されているイスラエルのメタファーである。そのイスラエルの民が「血しほを流して苦とうせし」というのは、当時はまだ、国家を樹立することができず、世界を放浪しているユダヤの民の現状を示しているのかもしれない。

ところで、中田は、明確にキリスト教と日本へのナシヨナリズムを表明していた。彼が積極的に行った論説やラジオ講演においても、そのような日本を特化する主張が明確に現われている。そして、彼のもう一つの明確な主張は終末思想であり、その前提として聖書に預言されていたイスラエル建国の到来への期待があつた。しかし、彼の主張は教派内においても波紋をもたらし、それに異を唱える聖書学院の教授たち——五教授と呼ばれる——との間で亀裂は深まった。イスラエル建国のための献金を要請する中田に対して、それに反対する者たちは、「日本聖教会」(委員長車田秋次)を結成し、中田自身は「きよめ教会」をなめることになる。昭和八年(一九三三)年のことである。^{*5}

そのような経緯からみると最初の説教にはホーリネス派の複雑な位相が見えてくる。ここでは、日本というナショナルな空間の絶対性やその優越性が支持されている。それは、中田の主張とも一致しており、ホーリネス派において共有されていた「信仰」だった可能性が高い。しかし、その一方でイスラエルの民が国家を樹立する必要性は、彼らが「神の祭司」であるゆえに否定される。彼らには「住居にようする土地と神を祭る所があれば足りる」のであり、「現在唱えられている如き国」は必要とはしないからである。イスラエル建国を主張していたのが、中田本人であつたことを考えるならば、この牧師の主張は「日本聖教会」へと分派していった「五教授」たちの主張に近

いものであったと理解できるかもしれない。この説教の時点で分裂は表面化していないものの、すでにこの時期から、聖書をめぐる解釈のずれは生じていたことになるだろう。

このような信条が、キリスト教が「翼賛化」したとみなされる以前の昭和五（一九三〇）年に述べられていることは、今一度、確認しておきたい。前後の時代状況を加味したとき、それを単純に批判すべきではないにせよ、深く留意すべき事柄ではある。むしろ、「罪からの救い」、「神からの愛」といったキリスト教が掲げる信仰上の理念と、このようなナシヨナリズムとが併存していたこと、そのことを問い直す必要があるのかもしれない。いや、さらにいえば、このようなきわめて「右寄り」にみえる信条をもつホーリネス派の教団が、第二次世界大戦下の宗教統制のもとで、弾圧の対象となり、殉教者までだすことになったのである。それを歴史の皮肉で済まされる問題ではないことは、ここで重ねて強調しておきたい。

琴がなぜ、毎週、聞いていたはずの説教のなかで、このような内容の説教を聖書の裏表紙に記したのか、その理由を本人も正確には記憶していない。だが、記憶からも取り払われた文字の断片が、戦前と現代との深い溝を——あるいは地下水脈を——垣間見せているのではないだろうか。

註

- * 1 丸山琴 一九三二「救の證詞」『後の雨』三九号、六。
- * 2 小出忍 一九八二『ホーリネスの群と教団の軌跡』ホーリネスの群事務局、山崎鷲夫・千代崎秀雄 一九七〇『日本ホーリネス教団史』日本ホーリネス教団、参照。
- * 3 聖書の記述は、これから起きることについての啓示という意味で「予言」という字があてられることがある。しかし、キリスト教においては、神から預かった言葉を人びとに伝える立場の者を「預言者」とよぶ。彼らは神と人とを仲立ちする仲介者と位置づけることができるだろう。ただ、本文での聖書の解釈は、これから起きる出来事についての啓示として聖書を捉えており、明らかに「予言」的なニュアンスが含まれる。
- * 4 戦時中に統合され、戦後も日本最大のプロテスタントの教派である「日本基督教団」は、戦後二二年たった一九六七年に、ようやく戦争責任の「告白」を表明している。さらに一七年後の一九八四年には戦時下における、信仰統制に加担したことについて謝罪をおこなっている。その一方、弾圧された側である「日本ホーリネス教団」も一九九七年に戦争責任に関する「告白」を発表する。そこで教団自身もまた「軍国主義と、それを支えた天皇制を支持した」点を認めている。
- * 5 小出忍、前掲書参照。

二章 信仰結婚

一節 結婚への道

栄との出会い

昭和六（一九三二）年、十一月のある日。琴の通う教会の青木牧師から勤め先の立野尋常小学校に電話があった。彼女が教え子たちに球技をやらせていた時のことである。今度の某日に一度教会を訪ねてきて欲しいという。その時は全く用件はわからなかったが、彼女の婚期を心配した牧師が、見合いの話を持ちかけてきたのである。琴が二四才になる直前であった。

その頃、琴はあまり結婚を意識していなかった。「もうすぐ主の日がやって参りますから、どうしても」とさえ周囲に話していたという。

主の日とは、「イエスの再臨」として聖書に記述されている。この世が終わるとき、イエスが再び来臨し、全ての人間を裁くための最後の審判が下される。これは、「六六六」という数字や「ハルマゲドン」という言葉で有名となった新約聖書の巻末、「ヨハネによる黙示録」に記された内容である。ちなみにイエスの再臨は、ハルマゲドンに象徴される人類規模の大きな破局の後に成就すると預言されていた。前章でみたように、当時のキリスト教徒の一部には、このような終末観が確かに伏在していたのである。

もちろん、琴と異性との交際が全くなかったわけではない。教員をしていた姉の家にはよく学生が出入りしてい

たので、遊びに行ったときに知り合う機会もあった。学校の同僚の中にも好意を持ちあう人も何人かいたという。だが、結果的に琴は、この牧師の紹介を通して生涯の伴侶、丸山栄と出会うこととなる。結婚に至るまで、二人は一度手紙のやりとりをしたただけだともいう。

当然のように家族の者は反対した。叔父や琴を可愛がっていた祖父も怒った。とりわけ父は、末っ子の琴を可愛がっており、手元に置いておきたかったようである。勤め先の校長までが、別にいい人を世話するからと、この縁談を断るように説得しにきた。これも、琴の両親が依頼していたらしい。

まだ、親の意志による結婚が多く、男女交際は自由に認められない時代だった。その時のことを琴は次のように記している。

民主主義とか自由結婚とか恋愛主義という言葉が、新しく言い出されていたものの、まだまだ、親に任せた結婚が多かった。私の父も、近くの人で話のある人のなかから選んで結婚させたいと思ったようであった。今なら父の気持ちが良いわかるが、そのときは信仰第一と思ひ、神が合わせ給うた人と信じた。好きな人というよりは、信仰していくための人を選んだのであった。

家族の反対をよそに彼女は、「信仰第一」に考えて伴侶を選ぶ。その時の気持ちとして、彼女は、また、ひとつの賛美歌の歌詞を記していた。

我、十字架を取らん

すべてを捨て

嘲り、罵り、身に迫るとも

世は皆捨つとも

恵みに依りて

血を流せる主に我は従わん

結婚にしてはやや悲壮すぎる決意にもみえるが、当時の琴にとっては、この結婚はキリストの教えに従うことと等価であつた。牧師と結婚するならば、間違いはないだろうという気持ちもあつたという。琴自身はこの結婚を「信仰結婚」と呼んでいる。だが、自分の信念から結婚相手を選んだことは、周囲からは恋愛結婚と同じようにみなされた。やがて、相手が鹿児島県の士族の出身であることがわかると、身内の者も渋々了承することになる。

強い信仰心から決めた結婚だつたことは間違いない。しかし、聞き取りの際には、最初に紹介された見合い写真が、師範学校時代に人気のあつた先生に似ていたからだとも語っている。「信仰」と彼女の趣味が一致したのだろう。

二節 栄の軌跡

鹿児島から関西へ

昭和七（一九三二）年四月一日、琴と栄は名古屋で簡素な式を挙げる。こうして二人は、名古屋で新たな生活を

始めることになる。だが、その様子を記す前に、夫、栄のそれまでの軌跡を辿っておきたい。

丸山栄は、明治四〇（一九〇七）年八月八日、鹿児島県隼人町内山田九七番地に生まれた。父は丸山熊右衛門、母はシカという。丸山家は旧士族の家であり、戸籍上、栄は丸山家の六男となっている。しかし、多くの兄弟は早世しており、彼の上には実質的な長男である栄次がいるだけで、彼の下には二人の弟と妹が生まれている。詳細な経緯は琴も分からないというが、栄の母は彼につらくあたってたらしい。幼少期には、叱られた際に火箸を投げつけられたこともあった。そのためか、九才の時には真剣に自殺を考えたこともあったと、後に栄は琴に語っている。栄自身も後の日記のなかで、「併し、僕は母に可愛がられた憶へがなく、叩かれた、ひねられた、殴られた……しか憶えてゐない」と記している。

尋常小学校の六年と高等科の二年をでると、栄はすぐに大阪のツテを頼って故郷を離れた。そこで栄は、当時、市内の西野田で質屋業を営んでいた知人のもとで働いた。一時、栄には、その質屋業を営む知人の養子になって家業を継ぐという話もでていたようである。

しかし、栄が十九才の時、その知人との折り合いが悪くなり、彼は神戸に移ることになる。この神戸で栄は、たまたま出くわしたフリーメソジスト派の路傍伝道によってキリスト教の存在を知った。その説教を聞いた彼は強い印象を受け、教会へ足を運ぶようになる。その当時の様子を栄自身は、後に次のように記している。

寂しい満たされない心持ちで神戸西開地の夜店を歩き廻つて居た其の夜、向ふから十字架の提灯を持った伝導隊の人々がやつて来られて辻で説教せられた。その時私は吸い付けられる様に感じ、気が付いた時は大地に全く

釘付けられて居た。言う事の出来ない懺悔の精神は、己ずから湧いて来ると同時に罪を迫められる恐れよりも、寧ろ愛なる神、審判主なる神、全治の支配者たる神に先ず罪赦され子とせられんと願ひ、幼い子供にある単純な信仰そのまゝ、が私の心に植付けられた。汚れと罪に染し迷ひの子が神の子とせられた喜びは以前の煩惱が大きい程に、又大きい罪の否増す所に恵も又否増すなりである。

故郷を離れて神戸に暮らすものの、安定した職にない栄は、「寂しい満たされない心持ち」で日々を過ごしていた。そのようななかでのキリスト教との出会いは、「吸い付けられる感じ気が付いた時は大地に全く釘付けられて居た」という峻烈なものだった。彼は自らの罪を自覚し、それを懺悔し、「全治の支配者たる神に先ず罪赦され子とせられん」ことを願う。それを栄は「幼い子供にある単純な信仰」と呼ぶ。後にみるように、彼が多くの説教を通じて語った神への信仰も、この「単純な信仰」であつたように思われる。この文章自体は、栄が牧師となつて以後であることは考慮しなければならぬ。しかし、彼が自らの経験として信徒に向けて記した記述には、それほど誇張も修辭を付与されてはいないだろう。

ちなみにフリーメソジスト派も琴が入信したホーリネス派と同じアメリカのメソジスト系の教派が母胎となつて居る。この教団は、一八六〇年に教義上の対立からアメリカメソジスト監督教会から分離した。日本では、明治二八（一八九五）年に、関西を中心に伝道を開始していた。

栄は、キリスト教からの出会いの後、二ヶ月足らずで洗礼を授けられることになる。場所は、神戸の須磨の浜である。一月二三日、他の十数名の信者とともに彼は正式なキリストチャンとなつた。ただしこの受洗に際しては、

次のようなエピソードが、栄自身の手記として残されている。

打消そうとしても忘れることのできない一つは、私が救われてより二ヶ月目の洗礼式での出来事。聖日の早朝五時から神戸須磨妙法寺川下の海の中で受洗した時のことである。輝かしい顔で海辺に集まった。この受洗式は、当教会にとつては伝道開始以来最初のもので、同年九月傳道開始以来の者のみの受洗式である。若者の連中では私などが一番であり、同年輩の兄弟方も四、五人あり、老若男女合わせて十五名ほどであつた。

先生が用意して下さいと言われたので、一同受洗服に着替えた所で私は裸體はだかでステテコ一つである。受洗をいかにして受けるのかを知らない私は、真つ先に海に飛び込んだ。そして一町ほど泳いだ。若手の連中は皆これによしとして、ヨオーエーゾエーゾと讃めてくれた。ところが稲葉先生が、慌てたのでしよう。「いけない、いけない、早く上がりなさい」という。

上がったところが、何と言つても十一月二十三日、寒くて仕方がない。その上、裸體でステテコからは水が滴る。水にまず飛び込んで上がつて来た所で頭に手を置いて祈つてもらへるのだ、これが洗礼式だと思つていた私
が、人より先に飛込んだのは、無理のないのである。

後で聞くと私と同じ考えでいた二、三の者もあつた。

ここに皆御並びなさいとの先生の御言葉があつて並ばねばならない。しかし、いくら私が単純な信仰の持ち主だと言つても、己がしくじりに恥じぬ訳にはいかなかつた。

寒さと恥ずかしさとが一度に迫つて「早く並びなさい」と言われる先生の目の前で「エーイ」と言つて持つた

小石を足元に投げ付けた。これは恥ずかしさと寒さとを一寸忘れる気休めであつたのだが、これに先生は「チェ」と齒のあいだでならし、「うーん」と全身をブルブルふるわせ無言のまま叱られた。尾を巻いた私は受洗者連と一緒に並んだ。讚美、祈り、注意、勧め、約二十分、皆青くなつて居た。いわんや先に飛込んでツボ濡れツボヌレのステテコ一枚の僕おや。

ここには栄の性格がよく現われている。誰よりも先に服を脱ぎ捨て、ステテコ一枚で海を泳ぎまわる。信徒たちの歓声にのせられて、「一町」というから一〇〇メートル以上も泳いだようである。その行為に驚いた牧師に注意されると、今度は子供のようになつてくされ、さらに牧師の不興をかう。それらの行為自体に悪意はないのだから、逆に始末に悪い。彼は純粹に「水にまず飛び込んで上がつて来た所で頭に手を置いて祈つてもらへる」と思つていた。だが、濡れネズミになつたあと、寒風吹きすさぶなかでの「讚美、祈り、注意、勧め」は、確かに「打消そうとしても忘れることのできない」出来事として、栄の心に刻まれただろう。

教会活動

そのような「失敗」も、無事に受洗を終えて教会の正会員となれば、語り草ですんだかもしれない。しかし、栄のその後の軌跡をみていくとき、この受洗バプテスマの場での行き違ひは、神への信仰を巡る対立そのものを暗示しているものでもあつた。実際、彼は、後に記した手記のなかで、次のように述べている。^{*2}

私が救われた教会、即ち神戸西開地自由メソヂスト教会は、什一献金と日曜日を全く神に献げ此を厳守しなければ正会員たる事を得なかつた。

此れが先生の信仰であり教会の会則でもあつた。ゆゑに多くの者は此の二つの條件を受け入れず教会を失つた。併しそれ等の人達の為に餘り心を痛めらるる様にも見えないので、先生の信仰を疑つた時もあつた。

斯くて躓いた者の不信仰と悪しき行為は座談や札拝の講談からどしどし聞かされた。此は悪しきを為した不信仰な者は凡の人の前で迫めよと聖書にあるから、全員一同に神様を怖れる心を深からしむ為であつたのだろう。先生御自身もそう辨解して居られた。

「什一献金」とは、文字通り自分のその月の収入の十分の一を捧げるものである。一〇〇円の収入のある者は一〇円を、三円しか収入のないものは、三〇銭の献金を行うという原則である。また、「日曜日を全く神に献げ」ることは、旧約聖書の十戒の最後に登場する戒めである。天地創造において神は、六日間かけて世界の諸々の存在を創造し、最後に人間を創つたあと、七日目には休息した。そこでその七日目は安息日とされて、人は神に感謝を捧げるために一切の仕事をしてはならないとされた。ユダヤ教から続く安息日の慣習が、この教会では遵守されるべきものとされていた。

これらを守ることは教会員の務めであることは衆も理解している。しかし、その原則を守れずに教会を去る者に対する牧師の態度を彼は問題にしている。経済的に貧窮し、何度も職を変えた経験をもつ衆にとって、教会を去る者たちの生活は他人事ではなかつたのだろう。「それ等の人達の為に餘り心を痛めらるる」どころか、「躓いた者の

不信仰と悪しき行為は座談や札拜の講談からどしどし聞かされた」ことに対して、栄のなかに牧師への違和感が芽生えていったことは間違いない。

ちなみにこの頃、栄自身は、焼き芋屋でどうにか生計をたてていたと記している。それ以前に栄はガラス器の製造工場でも働いていた。しかし、何度かの遅刻のために解雇されてしまったようである。「再三ならず失業した」とも本人は書いているので、これ以外にもいくつかの職を渡り歩いていた可能性が高い。

一方、琴が栄から聞いた話として記憶しているのは、彼が漬物屋の行商についていたということである。なかなか売れなかったが、「コウコ、オヤコウコいらんか」といつて口上を述べながら売って回ると、徐々に客がつくようになったという。掛けことばの威勢のよさと後に詩も吟じるようになる栄の声が功を奏したのかもしれない。もちろん、ここで得た金の十分の一は必ず献金するようにしていた。

翌年の昭和二（一九二七）年には、栄の弟の喜納も栄を頼って神戸に出てきている。栄にとって、最初にキリスト教の教えを伝えたのは、彼の実弟であった。「本当に自分をよく導いてくれた」と栄を振り返る喜納は、兄と自分のついで当時の仕事に対して、独特の考え方をもっていた。

喜納自身は、最初、神戸の郵便局に務めていた。三交代制で、夕方から翌日まで働き、翌日は休みとなる。だが、ほどなく洗濯屋の出勤をはじめようになる。洗濯物を集めて洗濯屋に持っていき、翌日に仕上がったものを届けるという仕事である。この仕事は歩合制のため、主人とは対等な関係だったと喜納は語っている。確かに自分が働きたい時間に働けばよいのだから、人に束縛されるものではない。自転車一台持ってさえいれば仕事はできるし、元気な限り失業の心配もなかった。また、実際に郵便局よりも儲けになったという。彼は自分の時間が作れば、

かかさず教会に祈りにでかけた。

喜納は、栄兄のシンコ売りも自分の仕事と同じだったと語る。自分が仕事をしようと思うときに働き、嫌になれば休む。時間があれば自由に教会に行くことができた。彼は、自転車で動くときは賛美歌を歌いながら回っていたが、おそらく栄兄もシンコを売りながら歌っていたでしょうと話してくれた。

一見したところ、定収入もなく、日々の生活に追われているかに見える自分たちが、実際には自らの意志で仕事を選択し、自由な生活を送ることができた。そのような意味づけが喜納の言葉からは感じられた。それは単身都会に赴き、独力で生活していかねばならない地方出身の青年たちが、社会と対峙したときに自らを奮い立たせるための矜持だったのかもしれない。キリスト教がそのような青年たちの精神面を支える一翼を担っていたことは、ここで確認しておいていい。

喜納は、徴兵される昭和八（一九三三）年まで神戸に留まった。一方、栄は、自ら牧師となることを志し、神学校に行くことに決める。しかし、彼が牧師となるためには、いくつもの紆余曲折をへる必要があった。

信仰と実践のズレ

この時の栄の手記には聖潔きよめという言葉が頻出している。すでに一章で紹介したようにこの言葉は、ホーリネス派やフリーメソジスト派において強調される「四重の福音」の一つである。ただ、この「四重の福音」においても、どの福音に力点をおくかは、各教派や時代、さらには個人の見解によってかなり違いがあったようである。少なくとも、この時期、栄が所属していた教会とその教派では、聖潔きよめの経験が信者にとって、とても重要なものと位置づ

けられていたようである。それは、信徒たちの生活の規範としての側面がこの言葉に付与されていたからかもしれない。

栄は、自らが救われた牧師について、次のように記している。

御聖霊の導きであるが、私は、この先生により救主基督の事を知る身とせられた。先生の御勧めによりて救れた私は父の如く慕い、又先生も私のような者が斯く慕ふ事をも恥とせずして色々と導き又恵んで下さった。

けれども、栄のこの言葉とは裏腹に教会の理念や信仰とは異なる現実が待っていた。

徹底的聖潔の教理に深い疑惑を生じた。と言うよりも先生は聖潔きよめられて居るのだろうかと考へた。

それから先生はレビ記の戒を守られ、聖言は旧新約聖書とも皆信じ行ふべきとなして居られた為に鱗の無い魚や蹄の割れて無い獣は決して食べられなかつた。故に私共も此を実行した。故に普段など或る者が食べると不信仰まじと詰つた。

所が斯く言ふ先生が海鼠を買つて居られるのを見付けたと言ふので信者間に大問題になつた事がある。私も何時か此を食して居られるのを見た。講壇の言葉と私生涯と異ふ。此が神と基督の良き識者であり且又一信者としても聖潔られた人であろうかと疑がつた。

まず、栄たち信者にとつての矛盾は、牧師の戒についての教えである。牧師は、「聖言は旧新約聖書とも皆信じ行ふべき」と考えていた。それはまさに「メソジスト派」という名前の面目躍如といつてもいいかもしれない。よつて彼は、旧約聖書の律法についても遵守していた。確かに旧約聖書には「すべての水のなかにいる生き物のうち、すなわち、すべて海、また川にいて、ひれとうろこのないものは、あなたがたに忌むべきものである」と記されている。そこで彼は「鱗の無い魚や蹄の割れて無い獣」を食べることを不信仰であるとなじつた。ところが、当の牧師が海鼠なまこを買つたところを信者に見られたというのである。

確かに海鼠には鱗はない。それを『旧約聖書』の律法に照らし合わせたとき、海鼠を食べることは、不信仰なおこないとなるのだろう。しかしながら、今日、日本のプロテスタント信者の多くは、旧約の律法で禁止されている豚や海鼠を何のためらいもなく食している。現代では、旧約の「律法」は、新約Ⅱ新たな契約としてのイエスの教えのもとに刷新されたのだから、それを墨守する必要はない、という判断がはたらいっているようである。いずれにせよ、当時の栄たちは「旧新約聖書とも皆信じ行ふべき」ととらえ、牧師の信仰を批判した。それは生臭物を食べないはずの僧侶が肉食をおこなつたのと同じように受けとめられたのかもしれない。信者たちは「聖潔られた人であるるか」という思いを強くしたという。

しかし、問題はそれだけに留まらない。律法を破つたことは信仰と実践の乖離である。だが、「信仰」についての考え方が極端に傾いたときに、そこには単なる乖離では済まされない複雑で微妙な問題が生じる。

扱、教会の会員中凡の者が徹底的聖潔を受けたいと飢え渴いた時がある。ある時論議は、先生の指導に由るも

のであるが、徹底的な聖潔は、徹底的な悔改めに初まるべきだとの事で迷惑を掛けた人に先づ御詫びする。それから會衆の前で言表すべきであると言ふ事を先生が主張されたので皆一切の罪汚れの告白をした。

徹底的に聖潔きよめられるためには、徹底的な悔い改めが必要である。そのような牧師の教えによって、教会員たちが聖潔を受けたいという思いに駆られたことがあった。この聖潔への渴望が、自らの罪を告白することをお互いに強要することになる。そこで罪を犯した人へお詫びし、そのことを會衆の前で言表すべきであるとされていた。

この時点までならば、多少の思い込みが含まれているとはいえ、信仰にもとづく清廉な行為として理解できる。だが、それに続く會衆を前にした罪の告白は、ある種奇異な方向へと向かう。

栄自身はそれを「斯くて一番言ひ難い性の事も告白しなければ本当ではないと言ふ所から、實に身震いする様な懺悔話が公衆の前で十日間連夜で続いた」と記している。もつとも語りにくいことがらとして、信徒たちは、自らが犯した性に関わる懺悔を會衆の前で行っていったというのである。それは、信仰への渴望がもたらしたものであるが、そこでの実践はキリスト教がさとす友愛や真理とは奇妙にずれたものにつる。

たとえば、ある信徒は「私は兄が死んだ其の夜、棺の側で性の自己満足をしました。」と告白し「又鶏に苟合した事もありました」とも語った。また、牧師夫人も「處女時代に二度ほど青年に辱しめられ」たことや「夫が聖潔の事をやかましく言ひ、全く妾に遠ざかりますので、妾は耐えられず便所で手淫をし、性の自己満足をし」たことまで信徒のまえで告げたという。

さらに牧師自身が、講壇のうえから「昨夜二度家内と交わったので腰が痛む。實に聖書に逆らった事だ」と告白

したという。これもまた信仰にもとづく悔い改めかもしれないが、それを聞いて牧師夫人が「荷物を包めて國元に歸ると言」いだし、牧師がおおいに困ったというのである。

聖潔を巡るメソジストやホーリネス系の信仰は、新たな時代のプロテスタント運動として展開してきた。それは人々の「内面」を問い直し——あるいは「発見」し——、自らの罪と向かい合うことで神への信仰を確立するものであった。だが、そのような聖潔は、個々人の「内面」を追いつめ、場合によっては精神的な潔癖主義へとむかう傾向があつたといえるのではないだろうか。その姿は、当人たちが真剣であればあるほど、どこかいびつで滑稽な印象を与えずにおかない。

三節 牧師への道

伝道師を志す

栄が牧師を志したのは、入信してそれほど時間をおいていない。受洗してから五ヶ月ほどたった頃、教会で聖別会があり、特別講師として上山鐵次という牧師が説教をおこなった。このとき上山牧師は、「ヨハネの黙示録」の三章一節から三節まで引用したうえで、信仰における「聖潔」の必要性を説いた。その説教に栄は強い感銘をうけた。

それ迄斯る強い光を受けた事はなかつたので、今迄の自分の信仰の不徹底を示され、うえ渇く如く聖潔の恵を求めた。特別集会の最終日の午後である。説教後祈つた後一同頭を降れたままの時、諸君の内もし献身して傳道

者（直接に御用に立つ）に成り度い者があるなれば手をあげなさいと上山先生が言はれた。

其の時一同威恩の情が高潮に達して居た時だから多くの人が決心した。其の瞬間、「私はどうしやう」との考へが先ず湧いて来た。併し私は其の時迄傳道者になろうなど、考へた事もなかつた時だから躊躇した。

所が不思議な事に胸の奥に叫ぶ聲がある、「献げよ」と……。もうありませんかと最後に先生が言われた時だ。恐い心を鎮めて手を上げた。一度決心した私の心は火の様に燃へた。

「強い光を受けた」ような説教の後、牧師は伝道者になる意志を信徒たちに尋ねた。その時、説教に感銘を受けた多くの信徒が、伝道への意志をしめした。栄自身は、その時まで伝道師になることなど考えていなかった。しばらく、躊躇いを感じる。だが、同時に「献げよ」という「胸の奥に叫ぶ聲」を感じたと栄は記している。あるいは、強烈な説教の印象と周囲の様子に高揚していたのかもしれない。「もうありませんか」という牧師の言葉に促がされるように彼は「恐い心を鎮めて手を上げた」という。

こうして栄は、キリスト教のしかも聖潔の教えに従った生活を送ることを心がけるようになる。

彼はその後、所属する教会の牧師の推薦で福山の聖書教会に奉仕していた。その時、彼が神学校へと向かう大きな経験があった。

扱、長らく待望んで居たが的確な御聲が松江で與へられた。それは稲葉先生の推薦で聖書教会に務めるようになり、松江に遣わされて居た時である。先ず馬太傳九章三六節が与えられ斯くて川辺に跪き、主よ我を遣し給へ。

私が傳道者となるべきでありますならば「立て」との聖聲を聞かしめ給へと只管ひたすら祈り求めてみると其の時上よりの聲、「行きて戦へ」との囁きを受けた。力強く細い聲で。

献身する決心をしてより五年目、はつきりとした厳かなる御言と御聲を戴いた。其の時、幻としては上より拔身の刃が己が目の前に落ちて来た。しばし此を打眺めて居ると左手の方から鞘が現れて自ずから拔身に鞘が納まった、斯くて彼方に消えて行つた（これは私のみ知る事）。

身を捧ぐる約束を神様にしてより毎日のように聖聲を下さい下さいと祈つて居たのであつたが初めて与えられたのであつた。故に凡を捨てて先ず神学校に行きて学ぼうと決心した。

栄が伝道者を志してから五年目にして「御聲」があつたという。彼は「馬太傳九章三六節」マタイが与えられたと記している。それは、彼が無作為に開けた聖書の一節であつたのかもしれないし、彼が祈っている最中に呼び起こされた聖句かもしれない。栄が親しんでいた当時の聖書でその箇所は、「牧者なき羊の如く衆人なやみ又流離になりし故に之を見てみ憫みたまふ」とかかれています。これは、本格的に伝道を開始したイエス・キリストが、病気の女や会堂司の娘、目の見えない者や口の聞けない者たちを次々と癒していったあとにされるされていた聖句である。救い主が人々に神の国の福音を伝え始めた一場面を記した聖句。それは牧師としてキリストの福音を伝えたいと願う栄にとって、自らの進むべき道を指し示す言葉そのものであつたのかもしれない。

栄はこの聖句を神からの言葉として受けとる。川辺に出て一心に祈っていると、「行きて戦へ」との囁きを受けたという。その「厳かなる御言と御聲」とともに栄は、一つの幻をみたとききのことしている。彼の目前で、天から

拔身の刀が彼の目前に落ちてきた。やがて、彼の左手方から刀の鞘があらわれ、拔身の刀はその鞘に自ずからおさまり、消えていったという。

この幻が喚起するものとは一体、何だったのだろうか。その意味について栄自身は、全くふれていない。ただ、彼は手記に「これは私のみ知る事」と記しているだけである。本人が何も記していない以上、安易な解釈は慎むべきだろう。

それでも、彼の資料を整理している立場としては、この幻がまるで栄の生き方を象徴するもののように思われてならない。彼はそれまでも、そして、これ以後も、接する人々とは、常に「拔身」で相對してきたのではなかっただろうか。拔身ゆえの鋭さと危うさを彼は同時にもちつけていた。天から真直ぐに落ちてくる拔身の刀が栄ならば、大地から現われ刀をおおう鞘は、彼の伴侶となる琴であったのかもしれない。彼女は夫の拔身の鋭さをおさえ、その真直ぐな神への信仰をささえ、方向付けていく役割を果たしていくことになるだろう。

フリーメソジストからホーリネスへ

さて、栄は、神戸に戻り、この「御聲」を受けたことを牧師や信徒たちに報告する。彼らは一様にその報告を聞いて祝福してくれたという。そして、栄は牧師に神学校に入学したい旨を述べ、その推薦をねがった。

しかし、栄の願いはかなえられなかった。牧師は学校への推薦を拒絶したのである。

冬休みの拾四日も満ちたので、再び英国聖書協会の命で福山に遣わされたが、四月の入学も目前に迫って居る

ので入学願と先生の推薦状を学校に送らねばならない。故に心酔する先生に願った所、此を拒絶せられた。

其の時ほど暗きを憶へた事はないと言つても良い程、絶望の谷に落された。神学校に行かなければ一般の傳道者と認めてはもらへないし、又、自分に聖書を学ばずして傳道する力はなし、なやみ抜いた。斯くて先生の心を開き給へと寢食を忘れて祈つた。

この牧師の拒絶は、栄にとっては全く理不尽なものにうつつただろう。だが、すでにそれ以前から、牧師は他の信徒ならば推薦するが、「丸山さんはよお推薦しない」ともらしていたという。その理由についても、栄は詳らかに記してはいない。けれども、これに続く牧師との軋轢の経過をみていくとき、牧師が栄を「牧師」として推薦できなかつた感覚というものを推測することはできる。

「絶望の谷」に突き落とされた栄は、必死になつて推薦を願つたはずである。彼は「先生の心を開き給へと寢食を忘れて祈つた」と記しているが、彼の性格からして一度拒絶されたくらいで沈黙していたとは考えられない。牧師自身にも繰り返し、推薦してくれるように迫つたはずである。いや、この後の記述にもあるように「祈り」自体が、教会における「嘆願」としての側面をもっていたのではないだろうか。さらに彼は、教会の正会員たちにも牧師の推薦がえられるように働きかけた。だが、周囲の反応は冷たく、二人の信者が賛成してくれただけで、他の者たちは牧師に同調したという。

それでも、栄の覚悟はかわらなかつた。「神様の御召きが事実なれば必ず神学校に行く道が開けると信じ、聖書教会も二月即りで止めた」という。さらに松江で知り合いになつた伊藤馨牧師にことの経緯を打ち明け、ホーリネ

ス派が運営する聖書学院に願書をだすところまでこぎつけた。また、推薦はもらえないまでも「承諾」という形で稲葉牧師にも許可をえることができたという。

だが、状況は簡単には進展しなかった。願書を出してから二ヶ月たっても学校からの通知はこない。栄は「待遠しい事甚だしい。東京行きの汽車を見ると「あアーいき度い」としばしば泣いた程だった」と記している。必死な思いの栄に対して、教会員たちの反応はさめたものだった。

待つても待つても入学許可書がこない。故に或る水曜日の祈祷会で一同に祈りを乞ふた。「私が神学校に行ける様に祈つて下さい」と。

所が祈つてもらへぬは持論^(ママ)、先生及び奥さんから冷たく扱われ、主に忠実な信者達は、皆先生に着いて冷笑する。そして奥さんが言われた「もう此から丸山さんの相手になんなさんな。もう此から何も言わんがよい」と。

次章でも記すことになるが、当時、教会での祈りは罪の告白や神への感謝であるとともに聴衆への意識表明の場でもあったようである。そこで栄は自らの火急の願いを祈り、また、他の者たちへも同じ祈りを求めた。ところが、その祈りは教会員たちの冷笑を誘い、ついには牧師の妻から、「丸山さんの相手になんなさんな」と黙殺を宣言されてしまったのである。

栄の側にも言い分はある。最初に伝道者への意志を初めて打明けた時、牧師は「よろしい、貴方は正直だから」と言つて受けいれ、献身のことや神学校のことも承諾してくれたという。ところが、実際に推薦する段になると牧

師は、「其の言葉を左右された」わけである。

その後も牧師は、栄につらくあつた。フリーメソジスト教会の年会に牧師に連れだつて出席したときのことである。集会の二日目に栄は牧師と食事をともにした。そのとき、牧師は、「私が貴方に承諾書を上げたのは打消します」ときりだした。「私は貴方が入学する事を承諾したのではないから、推薦しないのなら承諾もいけない事ですから」というのがその理由である。

牧師の言葉は、フリーメソジストの神学校に推薦してもらえないならば、ホーリネス派の聖書学院へいこうとする栄の希望を踏みにじるようにもきこえる。栄ならずとも、これが宗教者の言葉だろうかと疑問が生じる。もちろん、これら全てが栄の手記であることは差し引いて考える必要がある。ただ、そのような状況を考慮しながらも、やや異なつた感想がうかびあがる。

ひよつとすると、この稲葉牧師も、栄と同じ直情型の思いこみの強い性格の持ち主だつたのではないだろうか。彼は栄の強い信仰を認めながらも、先走りがちな言動や行動に疑問を感じたのだろう。伝道者に求められる冷静さや信徒たち全体を見通す寛容さを栄に期待することはむづかしかつたのかもしれない。彼は、同じような資質をもつ栄の短所をしりぬいていただけに、伝道者となることに危惧の念を抱いたのではないだろうか。どうもそのような気がしてならない。

だが、そのような視点も「人間」的なものの見方かもしれない。

栄のもとによろやく、一通の手紙が届いた。「聖書学院の車田秋次先生が承諾して下さいましたから聖書学院に行きなさい」という通知が、松江の伊藤馨牧師からもたらされたのである。こうして、よろやく、栄にもあらたな季節

が訪れることになる。ここで直接関係はないが、この車田秋次は、後にホーリネス教会の初代監督の中野重治と教義をめぐって対立し、「日本聖教会」を開くことになった五教授の一人である。

昭和四（一九二九）年四月一〇日の夜、栄は、神戸を出発することになった。彼は、その経緯をやや高揚した筆致で、次のように記している。

四月十日夜行。懐かしの神戸を後にして東京へ。驛には母教会の重立った信者達のみ拾五六名来て見送った。斯くて小生の兄と弟。稲葉先生：見送らる。自分には餘りもの光榮。

發車するのに未だ拾五分程の間があつたので小生が車に乗ると一同が皆笑顔で色々と挨拶をして下され握手を求められた。

ベンチの上に腰をおろして下を向いて居られた稲葉先生は、最後にアーメンと握手して下さった。そして又淋しくベンチに：色は青褪めて實に氣の毒に感じられた。

藤本謙兄が「又逢ふ日まで」を歌って送ろうと皆に薦められたから、私は急いで言つた「いや、「いざ戦わん」を歌つて下さい」。

皆は元氣よく歌つて下さった。僕も歌つた。なお元氣よく、汽車は動き出した。小生を励まして下さる兄姉の聲が入り乱れる。兄は汽車と添い歩きして僕に言った「学費の足りない時は言つて遣しなさい。送つてあげるから」。

初めて腰を降した時は乗客室は満ちており或る者は寝てゐた。……僕は一人でも淋しくはなかつた。斯くて三

ノ宮、住吉、芦屋と過ぎていく。僕の乗つてゐる列車は東京行きだ……。おお主よ、あの夜の一時を今も感謝します。

聖書学院に入学する栄を信徒たちが見送りにきてくれた。彼を疎んじていた牧師も、そのなかにたたずんでいた。汽車をまつわずかな時間のあいだ、彼らは挨拶を交わし、祈り、賛美歌を歌った。信徒の一人が「又逢ふ日まで」を歌つて見送ろうというと、すかさず栄は、「いざ戦わん」をリクエストしている。自分の出発を「戦い」ととらえるところが、アグレッシブな彼の個性をよくしめしている。

そのような小さな輪のなかで牧師も「アーメンと握手して下さった」という。彼にとって恩師でありながら、伝道師に至る道のなかでは妨げの石でもあった。その存在を乗りこえ、新たな出発を迎えた彼にとって、牧師の姿は「気の毒」に感じられたという。

こうして、彼は、神戸をあとにする。東京の地は、彼に伝道師としての未来に続く橋となるはずだった。

そして、アッセンブリーへ

「おお主よ、あの夜の一時を今も感謝します。」

そう祈りながら向かった東京の神学校。だが、栄の神学校時代もまた、平坦なものではなかった。

栄が入学したのは、明治三四（一九〇一）年に東京神保町に開設された「東京聖書学院」である。一章でも記したように、当初は、独自の教派というよりもプロテスタント諸派へと人材を輩出する機関として組織化されていた。

その意味では、栄のように他の教派から牧師を目指して入学する者たちも珍しくなかったのかもしれない。栄が入学した頃には、東京の柏木に場所を移して開校されていた。

ただ琴によると、ホーリネス系の学校は、かなり厳格な信仰を信者に求めた。キリスト者である者は、祈りと信仰に生きるべきであり、清貧が旨とされた。けれども、身支度をきちんとするタイプであった栄のような信者は、しばしば、教会の雰囲気とは相容れないこともあったらしい。そのような信仰の表明の仕方を巡る見えない亀裂は、ある事件を境に決定的となる。

その事件は、栄が神学校に入つて、一年ほど経つたときにおきた。ある日、新橋に他の信徒と伝道に出かけた時のことである。他の信徒たちが今日ここにいる全ての人々に神の教えをのべ伝えるといった内容を宣誓したときに、栄だけがそのような宣誓をおこなわなかったという。それがどのような文脈でなされたものなのか、今日となつては知りようがない。

琴によると、当時のクリスチャンのあいだでは、伝道の際の宣誓として、「これからこの町を（神の教えにもとづいて）占領する」といった表現も用いていたという。そのような、やや荒唐無稽で空虚な宣誓に対して、栄だけがさめた意識をもっていたのかもしれない。だが、この出来事が決定的となり、栄はホーリネスの神学校を退学となる。また、琴も断片的にしか覚えていないが、寮の舎官との不仲も、退学の一因だったようである。

しかし、それでも栄はあきらめなかった。その後、彼は当時創設されたばかりの『聖書神学院』の聴講生となり、何とか伝道師の「資格」を得ることになる。この聖書神学院は、プロテスタントのなかでも新興の「日本聖書教会」、のちに「アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教会」へと再編される教派の神学校であり、昭和五（一九三〇）年に東

京の神召教会の一隅に設けられた。それは「平信徒伝道者を養成する信徒伝道学校の如きもの」であり、当初は夜間に授業が行われた。生徒たちは、昼間、各自の仕事に従事しながら神学をまなんだという。そして、修了者には「勸士（平信徒伝道者）」の免状が^{*4}あたえられた。

この「日本聖書教会」の基礎を築いたのは、アメリカのオハイオ州に生まれたC. F. ジュルゲンセンである。彼は、大正二（一九一三）年に日本に來日し、東京において伝道を開始した。その後、医学生であった弓山喜代馬らの協力のもとに東京から、長野、静岡、愛知などに伝道の輪を広げていった。やがて、信徒のなかにも自ら伝道を希望する信者が出てきたため、弓山たちは先の「聖書神学院」を設立することを決定したわけである。

いわば、神学校の夜間学校とでもいうべき学び舎で、ようやく栄は伝道者の資格を授かることができた。資格をえてほだなく彼は名古屋の教会での伝道を指示されることになる。昭和六（一九三一）年の一二月のことだった。

彼が赴任した「名古屋聖書教会」では、アメリカから派遣されたジョン・ジュールゲンセン牧師（C. F. ジュルゲンセンの長男）が伝道を開始していた。それ以前、宣教師たちの伝道は四年近く継続されていたようである。だが、栄が赴任してきた当初、すでに教会はあつたものの、信者は夫婦一組だけという状況だった。

ちようどこの頃、彼の恩師の青木とく氏から琴に洗礼を授けた伊藤馨牧師へと伴侶をたずねる手紙が届き、栄と琴は出会うことになったのである。

四節 名古屋での新生活

結婚式

栄たちの教会が発行していた伝道紙『後の雨』は、二人の結婚について次のように紹介している。

・・・季節は年々に過ぎ去りて二十六才の春を迎えられた名古屋日本聖書教会の福音の使者丸山栄氏は此の度目出度く天父の導きに依り不思議にも以外の所より妻を娶られて四月一日結婚式を挙げられた。教兄のお目出度を見聞した我等衷心より御二人の上に神の祝福いや増さん事を祈る者である。淋しい結婚式であったが会衆も三十名近く集まって来た。J. W. ジュルゲンセン師の司会の許に一粒社の横井氏が通訳で厳肅に式は初められて行った。会衆は、感激に満ちて賛美を合唱し二人の上に神の祝福ある様祈った序々に集いは進行し、賛美、祝辞、式説教、祝電朗読、親戚挨拶等々が終り、新郎新婦はカメラにパチリ、そして我等共に記念写真をカメラに納めた。その日朝から天気も恵まれて電報々と二十通以上の祝電が飛んで来た。又教会の留守の所にも来てとても賑やかだった。^{*5}

四月一日といえば、今日ではエープリルフールである。この言葉が当時、一般的だったとは思わないが、二人の結婚の背景を考えるとやや皮肉めいていて面白い。式には三〇名近くが参加したというが、多くは教会関係者であったようである。この記事からは、結婚式がおごそかでつつがなく進められたように記されている。ただ、これに続く記事には、いかにも栄らしいエピソードも記されている。

丁度二三日前丸山氏は、自転車から落ちて顔に大きな傷があつた。さすがの丸山氏もそれには閉口したらしくもう一週間延びて居たらなあと言つて居られた。けれども、少しも恥ぢず羽織袴で式場に自家用の汚ない自転車で飛ばして来たのには驚かされた。俺は薩摩武士ぢやで格好も何もあつたもんぢやねえト言つた風で相手の新客及び新婦に初対面される時など廻りの者に手に汗を握らせた*。

式を前にして栄は、自転車から落ちて顔に傷を負つたという。もつとも『後の雨』に掲載された新郎新婦の写真には、それほど大きな傷はみとめられない(写真11)。うまく隠したのか、すでに快方に向かつていたのかもしれない。それでも、おそらくその傷の元凶である「汚い自転車」で式場にやってくるところが、いかにも栄らしい。「俺は薩摩武士ぢやで格好も何もあつたもんぢやねえ」という台詞は、さすがに当日の本人の言葉ではないだろう。むしろ、このような形容が結婚式の記事で紹介されることが、すでに周囲の牧師や信徒たちからも、栄の人となりについてのイメージが定まっていた証左ではないだろうか。

他方、琴にとつて、名古屋の教会で執り行われた結婚式は、いたって簡素なものど記憶されている。母の奈良江の他には三男の幾三郎とすぐ上の姉、よし江だけが名古屋までついてきてくれた。しかし、名古屋への車中でも姉は、「なんで、そんなところ行くねん」と何回も繰り返していた。よし江には、妹が知らない土地で苦勞することが、目に見えていたのだろう。彼女は付き添ってはくれたものの、式には同席せず一緒に写真にも入ろうともしなかつ



写真11 結婚記念

た。

しかし、この三人の親族に琴は奇妙な縁を感じるようになるのだが、それはかなり後の話となる。

家族の反対を押しての結婚は、もちろん、彼女自身にとっても大きな試練であった。しかし、琴自身は「望むべくもないときにも、なお、信じること」というアブラハムの信仰を励みとして、神から与えられた自分の道を歩むつもりであった」と記している。

アブラハムとは、旧約聖書の『創世記』に登場し、「信仰の父」と呼ばれる人物である。彼は年老いるまで子供に恵まれなかったが、神の啓示の後に一人息子のイサクを授かる。ところが、イサクが成長したある日、神はアブラハムの信仰を試すために、息子を生け贄に差し出すように迫る。待ち望み、ようやく与えられた息子を生け贄に出さねばならない、そんな絶望的な状況でのアブラハムの決意を示す言葉が、琴が引用した聖句だった。

琴自身は、自分の性格を気弱で消極的であると評することが多い。だが、そのような自覚があるからこそ、こんな果敢な行為もできるのかもしれない。

新婚と伝道

栄、琴夫妻が、最初に居を構えたのは、名古屋市東区鎌田町である。当時の名古屋の近辺は、まだ都市化が進んでおらず、あちこちに農地が広がっていた。

そのようななかで琴と栄の生活は始まる。鹿児島島の士族の家系に生まれた栄と奈良の商家の出である琴にとって、新婚生活は試行錯誤の連続であった。料理の味付けにしても、琴としては精一杯辛口にしたつもりでも、まだ、栄

はうすいという。はつきりと美味しくないとはいわずに、「味噌汁一つも、満足にできんのか、水臭いよ」とぼやいて、塩を足していたそうである。

だが、琴は最初の一カ月ほどの間、栄が何を言っても口答えしなかった。だが、あるとき栄から思うことを言ってくれと言ってきたので、それまでの分をまとめてまくしたてた。最初は我慢して聞いていた栄だったが、しばらくするとやっぱ黙っていてくれた方がいいと洩らしたという。

「しかし、一度言い出したら、止まらないものらしい。教会に来る信徒のことや宣教師のことも言い合うようになり、これでいいのだと思った。けれど、栄は家の外では自分のことをよく褒めていた。近所の者から「あんたら御夫婦は仲良いなも」と言われたときには、こそばく感じることもあった」。そんなふうに琴は旧懐している。

註

- * 1 『聖書』「ヨハネの黙示録」
- * 2 丸山栄「稲葉先生と私」手記。以下、特に注のない場合は、この手記からの引用。
- * 3 『聖書』「レビ記」一章一〇節
- * 4 日本アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団教団史編纂委員会編一九九九『御言葉に立ち御霊に導かれて——教団創立50年史』日本アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団、七三
- * 5 J生 一九三二「お目出度」『後の雨』三二六号、四。
- * 6 J生 前掲書参照。